

ファンタスティック・フォー

2005(平成17)年8月4日鑑賞(試写会・リサイタルホール)



監督=ティム・ストーリー/出演=ヨアン・グリフィズ/ジェシカ・アルバ/クリス・エヴァンス/マイケル・チクリス/ジュリアン・マクマホン (20世紀フォックス映画配給/2005年アメリカ映画/107分)

……今年7月、『宇宙戦争』と『バットマン ビギンズ』をうち破り、『スターウォーズ エピソード3』に匹敵する興行収入を挙げたのが、何ともバカバカしい(?)この映画。1961年にマーベル・コミック社のスタン・リーが生み出したこのファンタスティックな4人プラス1人のキャラクターから、その後の『スパイダーマン』『X-MEN』『ハルク』『デアデビル』などが生まれたとのこと。「観客を集めているからいいじゃないの!」との言い分もわからないではないが、ハリウッド映画の危機(?)が伝えられている今、いつまでもこんな安易な企画(?)を続けていて、大丈夫……?

原作は1961年のアメリカン・コミック!

この映画の原作は、マーベル・コミックス社のスタン・リーによる1961年のコミックス本。その誕生話はパンフレットに詳しく書かれているが、ゴルフのラウンド中におけるアイデアの提案から始まったとのこと。

そのタイトルどおり、スーパーヒーローの4人がチームを組んで1人の敵と闘うことの面白さがポイントだが、このアイデアが後の『スパイダーマン』『X-MEN』『ハルク』『デアデビル』などの人気キャラを生んだとのこと。なるほど、なるほど。しかし……。

ストーリーのポイントは?

この映画のストーリーは単純そのものだが、一応の理解は必要。まず第1にこ

の映画の基礎となる研究テーマは、人間の進化の過程を解明することによって遺伝子病の治療や生命を長く健康に維持すること。そしてそのために宇宙空間へ飛んで、人間の進化に多大な影響を与えたと考えられる「宇宙嵐」の中心に迫れば、人間の遺伝子情報の秘密を発見できて、人類全体のために役立つと考えたことが出発点。

第2にそのテーマに沿って5人のチームが宇宙空間に飛んだところ、そこで計算違いの宇宙嵐に巻き込まれて、大量の放射能を浴びたため、それぞれが「超能力」を授かることに。注目はその超能力の内容だが、最大の被害者には外見に大異変が……？

何とか元の体に戻ろうと研究を続ける中、「ファンタスティック・フォー」と名付けられた4人は、自分たちの超能力が社会の役に立つことに目覚め、戸惑うことに……。

他方、邪悪で強力なパワーを持つことになった5人のうちの1人はかつての仲間であった4人への復讐とともに恐るべき計画を……。さあ、4人の超能力ユニットたちはこれにどう立ち向かうのか……？ 善と悪にたもとを分かち4対1となった、かつての仲間たちの対決の行方は……？

4人のキャラの紹介

私はあまり興味ないが、『ファンタスティック・フォー』というこの映画が成り立つためには、4人の名前とそのキャラの理解が不可欠だから、とりあえずそれを紹介しておこう。

①リード・リチャーズ（ヨアン・グリフィズ）『ファンタスティック・フォー』のリーダーで、「Mr. ファンタスティック」と呼ばれている。宇宙放射能の影響で、身体をゴムのように自由に伸び縮みさせる能力を持つ。大学時代から注目を集めていた天才科学者であり、スーの元恋人。

②スー・ストーム（ジェシカ・アルバ）4人の中の紅一点で、大学時代はリードの恋人だったが、今はDr. ドゥームの研究所で働いている。宇宙放射能の影響で自分の周囲の光を自由に操って、自身や周りの物体を不可視（インビジブル）状態にすることができ、「インビジブル・ウーマン」と呼ばれている。

- ③ジョニー・ストーム（クリス・エヴァンス） スーの弟で、かなりのお調子者。宇宙放射能の影響で、「FLAME ON！（燃えろ!）」の掛け声とともに、全身を発火させ人間たいまつ（＝ヒューマン・トーチ）状態で、猛スピードで空を飛べる能力を得たため、「ヒューマン・トーチ」と呼ばれている。
- ④ベン・グリム（マイケル・チクリス） 宇宙放射能を浴びた結果、巨大化するとともに皮膚が岩のように硬くなり、怪力を持つ。メンバーの中で最も外見の変化が激しく、「ザ・シング（物体・怪物）」と呼ばれることに。

敵役のキャラの紹介

結果的にこの「ファンタスティック・フォー」の敵役となるのはDr. ドゥーム（ジュリアン・マクマホン）。彼は大学時代リードの友人だったが、能力的にはいつもリードの後塵を……。

しかし、今や実業家として大成功しており、リードの研究のためにどーんと資金を提供して、宇宙嵐の解明により更なる大成功を狙った。

リードの元恋人だったスーも今はDr. ドゥームの研究所で働いており、この実験が成功すれば、Dr. ドゥームは巨万の富と名声そしてスーを手に入れることができるはずだったが……？

Dr. ドゥームからダースベイダーへ

今年の夏ハリウッド映画最大の話は『スターウォーズ エピソード3』だが、この『スターウォーズ エピソード3』では、あの黒づくめの鉄仮面ヒーロー（?）、ダースベイダーの正体とその誕生秘話が明かされ、大評判となっている。そしてこのダースベイダーのキャラのネタが、この『ファンタスティック・フォー』のDr. ドゥームにあったことが、この映画を観れば明らかになる。

もっとも、この映画の原作コミックは1961年だが、映画化されたのは今回がはじめてだから、スクリーン上のその鉄仮面の姿は果たしてどちらが元祖なのか、私にはよくわからない……？

しかし、多くの熱狂的な『スターウォーズ』ファンは、1度はこのダースベイダーの「元祖」を観ておく価値があるかも……？

何ともバカバカしい超能力だが……？

この『ファンタスティック・フォー』が書かれた1961年という時代は、米ソ冷戦の時代。その年で思い出す映画は『K-19』(02年)。ソ連が誇る原子力潜水艦が原子炉の故障を起こし、もしもこの原子炉の故障で爆発していたら、と考えなければならなかった大変な年が1961年だ。

そんな時代に、いくら仕事とはいえ、よくもこんなバカバカしい超能力のキャラを思いつくことができるものと感心するとともに、アメリカという国の自由度の高さと懐の深さにあらためてビックリ……？

前述のように、ゴムのように自由に伸び縮みできるリード、自分の周囲の光を自由に操って透明人間になることができるスー、全身を発火させて火の玉になるジョニーらが持つ超能力は、楽しさを通りこして明らかにバカバカしいもの……。とりわけ仲間内のケンカで見せる、リードとジョニーとの「対決」のバカバカしきときたら……？

ベンはちょっとかわいそうだが……

リードもスーもジョニーも宇宙嵐で大量の放射能を浴びた結果備わったのは、プラスアルファの超能力で、外見上のハンディは全くなし。これに対して、ベンは皮膚が岩のように硬くなり、巨大化して怪物となってしまった。これは彼が、1人宇宙空間に出て活動したため、襲ってきた宇宙嵐から逃げるのが遅れた結果だ。このベンのキャラが後の『ハルク』(03年)のブルースになったことは明らかだが、さすがに、この外見上の激しい変化はかわいそう。

さらにタチが悪いのは、スーの弟のジョニー。自分が放射能のおかげでモテモテのヒーローになったことを自慢するのはいいものの、折にふれて怪物状態となったベンをからかう始末……。

もっとも「普通じゃないということは決して不幸なことじゃない！」と確信をもってベンに対して話しかける盲目の黒人少女と知り合い、心を通わせ、最後にはハッピーエンド……？ さらに、リードの努力によっていったん元の身体に戻っても、敵のDr. ドゥームと闘うため、さらに変身するあたりは何ともはや……。

紅一点の美人度は？

『ファンタスティック・フォー』の中の紅一点がスーを演じたジェシカ・アルバ。私はもともとこの映画には期待していなかったが、それでも試写会に出かけたのは、この紅一点の美人度チェックのため……？

ジェシカ・アルバは今まで私が観た作品には全く登場していなかった女優だったが、さてその結果は……？

これでいいの……？

ハリウッド映画の興行収入の低下が伝えられているが、その原因の1つが外国モノのリメイク版やアメリカン・コミック頼みにあることは明らか……？ そしてそれはすなわち、映画制作におけるオリジナリティの欠如とイコール……。

もっとも、『キネマ旬報』8月下旬号によれば、全米新作興行成績ランキングの7月8日～7月14日では、この『ファンタスティック・フォー』がトップとなり、今年2月からずっと続いていた前年比マイナスの記録にやっとピリオドを打ったとのこと。

しかし、いくら興行収入をあげたからといって、こんな昔のアメリカン・コミックのキャラを登場させることによって、面白おかしく観客を笑わせようという作品ばかり続けていていいの……？

こんな状態が続けば、いずれ韓流や中国などのアジア映画にハリウッド映画も席卷されるのでは……？

2005(平成17)年8月5日記